

ある失語症患者における“場の意味”の変遷 —— 語られざるストーリーを追いながら

能智正博 東京大学大学院教育学研究科
Masahiro Nochi Graduate School of Education, University of Tokyo

要約

本研究は、豊かな言語的データの収集がむずかしいとされる失語症事例を対象に、そのライフストーリーの一側面としての「場の意味」に焦点をあて、その変遷を辿ったものである。筆者は、スナップ写真に表現されている対象者の像に、対象者本人からの面接、直接観察、関係者の面接等に基づくデータを重ね合わせて、対象者が10年ほど通っている授産施設との関わりの移りゆきを検討した。その結果、場の意味の類型として、「風景としての場」、「容器としての場」、「網の目としての場」という3つが抽出され、対象者はそれぞれに応じて場や自分を理解し、それに基づいて行動することで、長い時間をかけて新たな場の生成に関与していると考えられた。本人の語りに依存しがちなライフストーリー研究だが、今回用いられた方法は視覚的データも大幅に利用しており、適用する際の条件はあるものの、今後の方法論の展開に対して1つの刺激となりうるだろう。

キーワード

失語症, ライフストーリー, 写真データ, 場の意味

Title

Changing Interpretations of a Place by an Individual with Aphasia: A Study on an Untold Life-story.

Abstract

This longitudinal study on a life-story examines the manner in which an individual with aphasia, from whom rich verbal data cannot be obtained, experiences the place where he resides. The author examined the individual's images in snapshots, together with data obtained from direct observation, interviews with the individual, and interviews with the people around him in order to understand his relationships at the vocational aid center where he had been attending for a decade. The analysis revealed the place had three interpretations— landscape, container, and net. The individual appears to understand the environment and himself and behaves according to the interpretation that he draws. Although studies on life-stories tend to rely solely on interview data, the method implemented in this case made extensive use of visual data, and therefore, it could stimulate to the future development of research methodology.

Key words

aphasia, life-story, photographic data, meaning of the place

はじめに

本研究は、言語表出が制限された失語症者のライフストーリーを、面接や観察のデータだけでなく、画像や周りの人びとの報告を総合的に用いながら再構成し、そこに現れた“場の意味”の変化を、その文脈とも重ね合わせながら縦断的に捉えてモデル化することを試みたものである。ここでストーリーとは、特定の人や人びとの経験が複数の事象をつなげるという形で表現されたものであり、人が自己や外界を捉えるときの形式でもある(榎本, 1999; やまだ, 2000)。

ライフストーリー研究では面接が主要なデータ収集の方法だと考えられてきた。ストーリーは言葉による構築物であるので、ライフストーリーを検討するのに、直接その当人から言語的情報を得て、それをもとにライフストーリーを再構成したりその特徴を考察したりするのは、きわめて自然なことのように見える。そうした研究法で主にデータとなるのは表出された言葉であって、沈黙部分がデータとして扱われることは少ない。よりよい面接とは、そうした語られない部分ができるだけでなくしていくような面接だとされることがこれまでは多かった(Mishler, 1991)。実際には、生(ライフ)の時間に比して余りにも短い面接時間のなかで語られることなどが知れており、語られない部分の方がずっと広く深いとも言える。近年では、そうした部分を無視して言葉だけを重視するアプローチに対する批判もないわけではない(Miczo, 2003)。にもかかわらず、データとして用いられるのはやはり、語られた部分になるのが普通である。

ライフストーリーを研究しようとするとき、そうした沈黙が特に問題になるのは、何らかの理由で発話が制限された事例であるかもしれない。幼い子どもや知的障害がある人、重度の精神障害や認知症の患者のほか、本研究で対象とする失語症も典型的にそこに含まれる。失語症者の場合、語らない理由の大きな部分は、もちろん器質的な原因による言語使用の困難である(山鳥, 1985)。失語症は、大きく流暢型と非流暢型に分かれるが、特に非流暢型の場合には、質問や面接のテーマを理解でき、応答内容を漠然と思いついてい

たとしても、それを言葉にすることができない。またチャーマズ(Charmaz, 2002)は、慢性疾患患者の経験には語るることができない部分、なかなか言葉にしづらい部分が含まれており、語りのなかだけでは患者を理解できないだろうと指摘している。いずれにしても、失語症などの障害をもつ人の沈黙には、単一ではない背景があることを忘れるべきではない。

そうした状態にある人びとのライフストーリーが関心の対象になった場合、言語表出の制限を理由に研究を諦めるのでないとしたら、これまでどのようなアプローチがとられてきただろうか。第1のアプローチは、言葉の表出が制限されている人に面接を行う際の方法を工夫することによって、なるべく沈黙を語りに置き換えていこうとするものである(Biklen & Moseley, 1988; Booth & Booth, 1996)。例えば、一般に非構造化・半構造化面接で使われるような開かれた質問をなるべく避けて、事前調査に基づく情報をもとに閉じた質問を多く作っておくとか、沈黙のタイプに応じて質問の仕方を変えてみるといった手法が提案されている。しかし、それらの手法も言語の障害が重度になればなるほどに適用がむずかしくなるだろう。

2つめは、同じグループのなかで比較的語りの能力が保たれている人や回復した人を対象にするというものである。例えば、パーら(Parr, Byng, & Gilpin, 1997/1998)や能智(2003)は、中等度から軽度の失語症事例に対して面接研究を行って、その発話部分を中心に分析を加えている。認知症でも比較的初期に面接を行った研究事例もある(Pearce, Clare, & Pistrang, 2002)。このやり方は、言葉にすることができる時期を狙って「語れない」状態の経験について情報を得ようとするものであり、従来のライフストーリー研究の方法が比較的容易に適用できるという利点をもつだろう。ただし、言語が実際に制限されているその時の状態は、回想や予想の形でしか捉えることができないという限界もある。

以上2つのアプローチは、従来通り沈黙を言葉に置き換えていこうとするものだったが、3番目のアプローチは、沈黙部分の意味を何らかの形で推測していく方向性をもつものである。チャーマズ(Charmaz, 2002)は、面接場面における被面接者の身体のあるり方などノンバーバルな情報をデータとして組み込んで、

沈黙の意味を解釈していくことを提唱している。またアングロシーノ (Angrosino, 1994) は、研究対象者である知的障害者の行動や彼が大事にしている事物に関する情報を広く収集し、それらのデータがどういう意味をもつかを考察するなかで、その事例の人生に対する見方を浮かび上がらせている。これらの研究では、言語以外の方法で表出された情報によって沈黙部分を補っていると言える。さらには、沈黙もまた決して無意味なデータではなく、沈黙が生じた文脈に照らし合わせるなかで、言葉の不在という1つの意味として解釈可能になるかもしれない。実際、会話分析などでは、沈黙もまた重要な意味の源泉である (例えば、Schegloff & Sacks, 1972)。

このアプローチの特徴は、ライフストーリーを単に意識され言葉にされるものに限定しない点であり、そこには無意識に表現され行動に現れるものが含まれてくる。これはブルーナー (Bruner, 1990/1999) のナラティブ観にも通じるものであろう。彼によればナラティブは単に表出された言葉ではなく、認知心理学でいうスキーマやスクリプトにも似て、周囲とのやりとりのなかで作られ、自己の経験を理解したり他者に対して自己提示したりするための思考の枠組である。そうした意味でのナラティブは、音声の形で表現されてライフストーリー研究のデータにもなるのだが、それだけではなく、対人関係のなかで態度や行為にも反映される。こうした形でライフストーリーを捉え直しておくことで、言語的表出が制限された事例においてもライフストーリー研究の可能性が広がると考えられる。

もっとも、上で述べた第3のアプローチでは、現時点における行為とその背後に推測されるライフストーリーしか対象にできないという限界もある。その人の行為をデータにして、もう少し長いタイムスパンでライフストーリーを捉えていくためには、収集するデータやその扱いにまた別の工夫が必要かもしれない。今回の研究では、比較的軽度の非流暢型失語症をもつ事例を対象に、面接を通じたデータ収集や直接的な観察の他、過去からの画像データや周りの人びとの証言も補足的に用いて、その事例のライフストーリーを捉えることを試みる。

今回特に注目したいのは、「生活の物語」という意味でのライフストーリーであり、その事例が自分の生

活の場をどのように意味づけているかという点である。人間の認識が時間と空間という大きなカテゴリーによって規定されているとしたら、生 (ライフ) の織物を成り立たせる縦糸と横糸として、時間に関わるストーリーと同時に空間に関するストーリーも探求していく必要があるだろう。場所の意味については、1970年代以降、現象学などの影響を受けながらヒューマンスティックな人文地理学の運動として研究が進められてきた (Relph, 1980; Tuan, 1977/1988)。しかしこれらは場所の方が関心の焦点であり、「空間」と「場所」の差異や場所という経験の一般的特質などの分析が中心になっていた。

近年の心理学研究では、場所の経験に関して、よりいっそう個人の体験に的を絞った知見が見られるようになった。例えば発達心理学や社会心理学などでは、「居場所」をもつことが人の行動にどう影響するかなどが考察されている (藤竹, 2000; 住田, 2003)。質的研究でも、例えばクロスリー (Crossley, 2001) は、HIV の患者が故郷である田舎、および都市をどのように意味づけているのかを検討し、それぞれの場の多義性を患者のアイデンティティとの関連で明らかにした。また、同じ地理的な空間においても、南 (2001) の示したように、都市の再開発によってマイクロな住環境が変化し、生活世界が変容してしまう例もある。そうした変化に対して、人々は次第に適応していくのだが、その適応の仕方とその語りには個人差が見られるということも、短大入学時の移行体験の研究 (川野・佐藤・友田, 1998) 等によって示されている。

障害をもつということは、生活の場全体の意味が変化する体験である。レルフ (Relf, 1976/1999) が指摘するように、場所は中立的なものではなく、人の身体機能や欲望との相関によってその意味が変化する。だとしたら、身体障害にせよ知的障害にせよそこで生じた自己の変化は、場所という体験の変化にもなりうる。加えて、障害をもつことになった人々は、それまで経験することのなかった人間関係や空間に出入りせざるをえなくなるかもしれない。そうした新たな生活の場においてどのように適応していくのかということは、障害者の臨床においても重要な問題の1つであろう。事例が構築する場所の「語り」の変化を長期的に追いかけることで、そのプロセスの特徴や体験の変化を引

き起こす条件を明らかにしていくことは、障害をもつ人々の理解と支援のために意義があるばかりではなく、一般心理学に対しても示唆するところが大きいと思われる。

方法

調査協力者

今回の調査協力者は、筆者の関わっている身体障害者授産施設 T 作業所の利用者で失語症をもつ夏川さん（仮名）である。年齢は 2005 年 1 月現在 57 歳で、発病から約 13 年が経つ。東京に生まれ、幼少期からスポーツ好きで、学生時代は競泳の選手でもあった。大学卒業後は、もともと衣服に関心があつて紳士服店に入社し、発病直前には支店長も務めた。残業が当たり前という多忙なものだったが、仕事自体は嫌いではなく、充実した生活だったという。私生活では 20 代で結婚し、男の子に恵まれて家族 3 人で暮らしていた。健康状態は概ね良好で、健康診断でも異常は見られなかった。

1991 年暮れ、夏川さん 45 歳のときに脳卒中の発作が起こり、生活が一変した。12 月に入り原因不明の体調不良が続いたかと思うと、30 日の夜に自宅で倒れ、夏川さんはすぐに病院に運び込まれた。緊急手術で一命をとりとめたものの身体の麻痺と言語の障害が残り、入院して PT（理学療法）、OT（作業療法）、ST（言語療法）などのリハビリ訓練を行った。その結果、当初はほとんど動かなかった身体も少しずつ回復していった。10 ヶ月ほど経つと、夏川さんはしきりに家に帰りたがるようになり、毎週通院するという条件で、1992 年の 10 月に退院した。その後 1 年半ほど、病院や福祉センターに通つてのリハビリが続けられたが、その間夏川さんはもっぱら奥さんに頼りきりで、病院も含めて外出時には常に奥さんが付き添っていた。そうした状況のなか、もう少し日常的な場面での会話を増やして人づきあいの場を広げ、より積極的に活動する目的で、1994 年の 5 月に T 作業所の利用を開始することとなった。

2005 年 1 月現在、夏川さんは T 作業所のもっとも長い利用者で、作業所を主要な活動の場としている。今では杖をつきながら外を散歩することは問題なくできるし、室内なら杖もあまり使わない。言語面でも、話を聞いて理解するだけならかなり可能で、自発的に出てくる言葉も少しずつ増加している。ただし、複雑な指示をただちに行動に移すことはときに難しく、面接で自分のことを詳しく語ることも困難であるように思われた。ここで、夏川さんの発話の例を見ておこう。これは、夏川さんが筆者と職員（海原さん＝仮名）とともに、昔のスナップ写真を眺めて自由に会話したときのトランスクリプトからの抜粋である。

海原	（スナップ写真を示して）これは覚えている？
夏川	うん、覚えてるね。はい。ねえ。公園ですね。はい。そうすね。……ああ、かた一、うんと……
筆者	え？ この、場所ですか？
夏川	うん。場所。……（中略）
海原	タカー
夏川	カ、タ、カー
海原	一ハタ。
夏川	そう。「ハタ」ですね。
筆者	高幡不動。
夏川	そうです。はい。はい。（大息）ハ一、ハ一、ハ一。

このように、夏川さんは相手の言葉の一部を使って会話をつなげることはできるし、「はい・いいえ」の応答もほぼ適切である。だが、自分から実質的な語を表出し語りを展開することはできず、面接のみに依存してライフストーリーに関するデータを得ることが難しいのは明らかであった。

データの収集

この研究は、その T 作業所における夏川さんと筆者のインフォーマルな関わりから始まった。筆者は、1998 年 8 月から T 作業所にボランティアとして入り、その傍ら研究者として観察記録をフィールドノートにつけ始めた。観察は利用者の作業を手伝ったり、休憩時間に雑談したりする参加観察で、日常活動のほか、

文化祭や小旅行などの行事にも積極的に参加した。当初は、作業所利用者と職員の関わり全般について検討しており、折に触れて職員の面接も行った（能智、2000）。観察開始の頃、夏川さんは作業所を利用して約4年であり、筆者のようなボランティアに対しても礼儀正しく、挨拶には必ず大声で返事した。自分から挨拶以上の話を始めることはまれだったが、話しかければ、答えられる範囲で言葉が返ってきた。

夏川さんに関する集中的なデータ収集は2003年の春から夏にかけて行われた。まず、夏川さんと彼の担当職員と筆者で、作業所で撮られたスナップ写真を見ながら、3回にわたって面接の場もたれた。時間は各回1時間半から2時間程度だった。この面接では、時系列的にスナップ写真を見ながら、そのときのことを覚えているか、どんなことを覚えておりどんな気持ちにするか、などといった点を中心に会話を進めた。職員は、夏川さんが出来事を想起するのを援助したり筆者に詳しい状況を説明したりするために、しばしば会話に加わった。上で引用した会話記録はそこからとられたものである。

しかしそのときの面接記録だけでは、夏川さんのライフストーリーをどのように理解すればいいかわからなかったため、次のようなデータも収集し、補足的に用いることにした。

①**夏川さん夫妻との面接記録** 2003年8月末に、夏川さんの奥さんとの面接を2時間程度かけて行った。このときは夏川さん自身も同席し、ご夫婦で筆者の質問に答えていただき、思い出すことがあれば自由に語ってもらおうという形式をとった。語りの時間は奥さんの方が圧倒的に多かった。

②**夏川さんに関する観察データ** 筆者が1998年から記録したフィールドノーツから夏川さんに関するものを抜粋し、それをデータとした。筆者による直接観察のデータのほか、筆者が作業所の職員と面接した際に職員が夏川さんに言及した部分があれば、文脈も含めて取り出した。

③**夏川さんを写した作業所の映像記録** 作業所では、1993年から2000年頃まで、行事の様子や作業所の日常をスナップ写真に撮り、それを焼き増して希望者に実費で配布していた。撮影者は主に作業所職員であり、撮影の係が適宜決められて、なるべく多くの利用者の

姿と行事の様子を記録されたという。そのスナップ写真が、1999年までのもので年に200~300枚、2000年には100枚程度保管されていたので、そのなかから夏川さんが写っているものを選びデータとした。また、近年ではビデオで記録された行事もあり、そのビデオ記録も補足的に用いた。

データの分析

分析の手順としては、まず③において、写真に写る夏川さんの行動、表情や服装なども含め、彼自身や周りの環境に対する彼の感情や認知が現れていると思われる部分を、文脈も含めて取り出し、記述してリストにした。とりわけ注目されたのは、夏川さんの表情、姿勢、服装等の変化であった。取り出されたそれぞれの部分について、「これはどういう感情・認知を示しているのか」、「その感情・認知が生じた条件は何だろう」、などの問いかけを行いながら、推論の根拠となるデータを探索する作業を行った。こうした分析において、夏川さんのライフストーリーのなかでも、作業所という場に対するストーリーの変化を取りだせるように思われた。それとほぼ並行しながら他の種類のデータの分析が進められた。上記の②など、テープに録音されたデータは逐語的に書き起こされ、夏川さんが作業所を利用するようになるまでの人生の経過や、作業所を利用し始めて以降の行動が現れている箇所を拾い、それまでの分析結果と重ね合わせてモデルを構成していった。これはある意味で、分析的帰納法に似た過程と言える（Robinson, 1951）。

分析の結果をもとに、筆者は夏川さんの生活史をまとめ、夏川さんご夫婦と作業所の職員の方に提示した。このときの文章はあくまで夏川さんとその関係者が読むことを想定し、考察なしの記述が中心であった。夏川さんご自身にどれだけ理解していただけたかは判断がむずかしいのだが、奥さんからは、「わかりやすく整理されており、特に追加や修正が必要はない」などの非常に好意的なフィードバックを受けた。以下で提示する研究結果はその時に書いた文章をもとにしたものだが、追加的に心理学的な意義なども含めて議論を展開している。

T作業所の概要

夏川さんのストーリーの対象とも言えるT作業所についても簡単に述べておこう。その正式な種別は「身体障害者通所授産施設」であり、「授産施設」とは「雇用困難又は生活に困窮する人を対象とし、必要な訓練を行い、職業を与えて自活させる施設」である（内閣府，2004）。定義上は、リハビリを目的とした狭い意味での更生施設ではないし、永続的な生活の場の提供を目的とした生活施設でもない。授産施設では、就労のためのスキルを身につける機会が用意され、それを生活の自立のために役立ててもらうことが中心的な活動となる。授産の活動はまた、老人施設や精神障害者施設などで行われるデイケアサービス——機能維持・回復訓練や娯楽活動、食事・入浴サービスなどが中心となる——ともまた異なっている。

T作業所は後天性の障害者に対する就労支援の場として、別の作業所の分場という形で1992年に設立された。定員は19名で、大半は脳卒中など後天性の脳損傷をもち、後遺症としては身体障害の他に記憶・認知の障害や言語の障害も認められる。提供されている作業には、クッキー作り、牛乳パック再利用の手漉きハガキやお面作り、木工などがあって、特に手漉きハガキやお面については、地域の小学校や老人ホームなどで出張教室が開かれている。その他、押し花やカラオケなどのレクリエーション活動、半日あるいは一日の外出訓練、年1回の一泊旅行なども行われている。開設時の理念としては、この施設は、利用者が次の段階に進むためのステップを提供していることになっているが、現実には職場復帰等の目標を実現する人は比較的少数で、T作業所をデイケアサービス的に利用する人もいる。このように実際のT作業所は多様な機能をもち、個々の利用者はそうした多様性のなかで、自分なりにT作業所を意味づけていると推測される。

夏川さんと作業所との関係の変容過程

ここでは、夏川さんの写ったスナップ写真を1つの起点として、他のデータとも結びつけながら、夏川さ

んとT作業所の関わりの変容過程を跡づけていく。スナップ写真を撮られるというのは、ある意味で自分のプライバシーが切り取られることであり、だからこそ、私たちは見知らぬ人からカメラを向けられたりすると、決していい気持ちはしない。カメラを向けられたときにそのカメラに対して好意的に反応できるのは、写真を撮られるという状況に正当性を感じていたり、あるいはカメラを向けている人に対して肯定的な感情をもっていたりする場合であろう。スナップ写真に写った姿は、状況や撮り手などに対するその人の意味づけを映しているとも言える。作業所で撮られるスナップ写真に残る夏川さんの像も、作業所やそこでの活動やそこにいる人びとに対する彼のストーリーを知る手がかりとなるだろう。以下では、1994から2004年までの11年間を4つの時期に分けて、夏川さんと作業所との関係を整理していきたい。

1994～1995年前半：無表情と無関心

夏川さんがT作業所を利用するようになったのは、1994年の5月だった。この年から翌年初頭に撮られた写真を見ると、そのほとんどに夏川さんはいかにも無関心そうな表情で写っている。カメラの方を向いている顔は少ないし、笑顔もほとんど見られず、背中丸まりうつむきがちな姿勢が特徴的である。典型的な例が図1である。これは外出訓練でビール工場に行ったときのものだというのが、他の利用者や職員が楽しげにカメラの方を向いて微笑んだりポーズをとったりしているのに対して、夏川さん（もともと右の男性）は無表情に下を向いている。集合写真でカメラの方に視線を向けているときですら、視線はカメラに届いているというよりもカメラの手前の何も空間をさまよっているように見える。試みに1994年に撮られた夏川さんのスナップ写真を探してみると、他の年は軒並み50枚以上見つかるのにこの年は15枚にすぎない（表1）。職員が新しい利用者に対してはよりいっそう注目し、家族にスナップ写真を配布するために比較的カメラを向けがちであるという事情を勘案すれば、5月からの通所であることを考慮してもかなり少ない数だと判断せざるをえないだろう。これは夏川さんが作業所の行事にあまり参加していないことを示している。また、



図1 1995年初頭の夏川さん①（右端の男性）

表1 夏川さんの写るスナップ写真の数と写り方の変化

年 (総数)	1994年 (15)	1995年 (51)	1996年 (79)	1997年 (63)	1998年 (81)	2000年 (44)
カメラ視線 (%)	20.0	17.6	38.0	42.9	66.7	47.7
笑顔 (%)	0	19.6	26.6	25.4	26.9	40.9
仕草 (%)	0	0	1.3	1.6	7.4	2.3

そのうちカメラの方に視線が向いているものは2割程度で、そこに笑顔が全く認められないのも特徴的である。

未知の場としての作業所

94年は、夏川さんと奥さんが口をそろえて言う、発病後最初の5年の「もっとも辛い時期」に含まれている。夏川さんには珍しいことなのだが、筆者の「いつ頃がたいへんだったか」という問いかけに対して、はっきりと次のように述べている。

いやほんとに、5年間、しゃべれない、はい。(中略)からだは……(海原：全然もうからだか……)動かないですねえ。うん。“はい、はい、はい！”……でした、ほんとに。

奥さんもまた、発病後の生活をいくつに分けるかという質問に対して、「最初の5年間くらいは、病気、

に対して、全面的にこの人[の介護]っていう感じで、なんとか元気になって、っていう感じで過ごしてきましたよね、たいへんだった。」と述べている。発病後5年というのは、夫妻の共有する過去の区切りなのである。

そうした時期に通い始めたT作業所だったが、奥さんによれば、夏川さんは当初それほど通所に乗り気ではなかった。ひとりでバスに乗れるかどうか、周りの人とコミュニケーションがとれるかどうか、などといったことが不安だったのだろうと奥さんは言う。それまでも病院での訓練には通っていたわけだが常に奥さんが付き添っていたし、夏川さんも奥さんに頼りつきりというところがあったと、当時の言語聴覚士も報告している。また、病院がどういう場所であるかは誰でも常識として知っているが、授産施設という場所は、多くの人にとってそれほどなじみの場所ではないし、当時の夏川さんは言葉の障害もあって、説明を受けても十分には理解できなかったであろう。利用を始めた

直後の T 作業所は、安全な場所から離れた未知の空間であり、しかも失敗しても助けてもらえるかどうか定かではない、十分な信用がおけない場であったのではないかと思われる。実際、「慣れるまでそれは大変だったんですね。バスに乗って、ひとりでここに来るっていうのはね。」と奥さんは回想する。

病院的な場としての意味づけ

当時の夏川さんはもっぱら障害をもった自分に目を向けており、それを改善するのに役立つかもしれない場として T 作業所を理解していたように見える。ある職員によれば、夏川さんはなかなか言葉が出てこない場面では、「ちくしょう、ちくしょう」と悪態をつき、ときには涙を流して悔しがったという。夏川さんは、T 作業所で提供されていた、お面作り、葉書作りなどの作業に飽きたらず、作業所の本棚から子ども向けの本を借りて毎日家で書き写すなど、自発的に練習に励んでいた。通い始めた当初の夏川さんにとって、受障の前には利用したことのない作業所という未知の場は、ままならない自分の治癒に役立つ訓練を提供してくれる場として、つまり、かねてよりよく知っていた病院という場の延長として意味づけられていたのではないかと推測される。

作業所という場に対する夏川さんの感じ方は、その服装にも現れている。当時の写真を見ると、ジャージのズボンを履いて写っていることが多く、上半身もポロシャツであったりセーターであったりするなど、非常にラフな格好である(図 2)。奥さんはその点を次のように語っている。

最初はやっぱりこう、ジャージの、脱ぎ着、楽なの……上も伸び、伸びて、ポロシャツみたいな、着やすいの、っていうのをしましたよね。
(……) 最初はみんなこれ、ジャージ着て、きつと……割と履きやすくて、動きやすくてと思ってたから、こういうの履いてたんですね。

つまり、服装は病院にリハビリに行くときと似て、機能重視で選択されていた。元来は服に気を遣う方だった夏川さんだが、当時作業所に通う際はほとんど無頓着で、奥さんが差し出す服をそのまま着ていた。彼

にとって T 作業所は衣服に気をつかうべき場所ではなく、自分がどう見られても特に気にならない場であり、もっと言えば、自分に積極的にまなざしを向けてくるような他者がいない、あるいは気にならない場とみなされていたと言えるであろう。

行事に対する態度

それと関連して、夏川さんは当時 T 作業所を作業の場としては利用していたが、訓練と娯楽を兼ねた他の行事への積極的な参加は見られなかった。例えば、クリスマス会などの行事に夏川さんが出席している写真は何枚か残ってはいるものの、そこに笑顔は全く見られない。また、年 1 回の一泊旅行は多くの利用者が楽しみにする行事だが、夏川さんはこの旅行にも最初の 2 年は参加していない。はっきりした理由は本人からも奥さんからも聞くことはできなかったけれども、ただ、職員の話をもとに、ある程度推測することは可能である。それによれば、旅行は利用者にとって楽しみである半面、重い負担を強いる面もあるという。つまり、昼間だけなら「よそ行きの顔」を見せていられても、一泊となると、人によってはそれがむずかしくなる。疲れて感情の起伏が激しくなる人もいるし、周りの人に見せたくない失敗をする確率も高まる。旅行に参加する場合には、そんな事態に陥らないという自信か、自分がそうならないように職員がサポートしてくれるという安心感、あるいは、自分がそうなくても周りの人は許容してくれるという信頼感が必要になる。そのどれかが、当時の夏川さんにはまだ持てなかったのではないかと考えられる。

1995 後半～1997 年：笑顔の出現

2 年目の後半頃から、スナップ写真のなかの夏川さんの姿に少しずつ変化が見られるようになる。とりわけ顕著な変化は、カメラに向かって微笑んだり口を開けて笑ったりする表情の出現である。それが初めて見られたのは、95 年暮れに行われた忘年会のスナップ写真(図 3)なのだが、この写真のなかで夏川さんはちょっと横目でカメラの方を向き、ためらいがちに微笑んでいる。数量的に見ても、94～95 年に比べると 96～97 年には夏川さんが写っている写真の総数が増



図2 1995年初頭の夏川さん②（中央の男性）



図3 1995年暮れの夏川さん（左の男性）

えると同時に、カメラにまなざしを向けている写真の数も著しく増加している（表1）。

この時期以前は、笑顔の写真があったとしてもそれはカメラとは別の方向を向いたものだった。例えば病院でも人は、入院が長期化した折などに知り合いが増えて、笑いながら雑談するようになるかもしれない。しかし、そこでカメラを向けられたときカメラに微笑むことができるかどうかはまた別の話である。人はカメラに対して儀礼的に微笑むことはありえるが、その儀礼を行うにも、カメラの向こう側にいる人や周りにいる人が同じ場を生きる儀礼の対象だという意味づけが必要であろう。そうしたストーリーが構築されたのがこの95年後半から97年という時期と言えるかもしれない。この時期は同時に、先に述べた「もっとも苦しかった時期」だったということだが、1996～97年はその終結期にあたる。奥さんは、この時期以降夏川さんが「落ちついてきた」と感じている。

服装の変化

笑顔の出現と増加と並行して、比較的早い時期に生じているのは、作業所に着ていく服装の変化である。トレーナーを中心とした動きやすい服から、次第に、街に出る時に着るようなこざっぱりした服を着るようになったことは、スナップ写真にも見ることのできる（撮影時期としては少し先になるが、図4などを参照されたい）。奥さんは、当時起こった服装の変化を次のように語っている。

だんだん、ああじゃやだこうじゃやだって、普通のズボン、上もこういうシャツ着るよ、ボタンのって、ずいぶん変わりましたよね、だからね。
（……）なんか結局、みんなも、普通のおズボンはいてたりなんかして、自分もそういうおズボンがいてって言ってだんだん、きとおズボンがこう、革靴だとか、そう。変わってきた。着るものも、うん。そう。トレーナーみたいなもの着て行ったのが、それはいやだって。

この頃、夏川さんは、T作業所が病院のように機能一辺倒の服で来るべき場ではなく、「普通」のかっこうで来る場なのだというふうに関心を変化させているように見える。ここで「普通」というのは、奥さんの語りからもわかる通り、折り目のついたズボンであったり革靴であったりする。

こうした服装の変化は、自分や周りの人びとに対する態度の変化でもある。病院だと、他の患者はあくまで他人であり、彼らのまなざしを気にすることは少ないだろうが、作業所では人びとは毎日顔を合わせ、少しずつ顔見知りにもなっていく。夏川さんは、その過程で、自分を「みんな」（他の利用者）と同じような身なりをするべき存在として定義し直しているように思われる。また、「みんな」は夏川さんにとって一種の規範であり、自分にまなざしを向けてくる存在と感ぜられるようになったのかもしれない。そしてその



図4 1998年春の夏川さん（Vサインをする男性）

規範からはずれたときに体験されるのは、「恥」の感情である。実際、現在「普通」の恰好をして通所している夏川さんは、当時のスナップ写真（例えば図2）を見たときなど、「うわあ……恥ずかしいですね、ほんとにね。」とつぶやく。

生きられる世界の拡がり

1996年には、主に作業所の外の世界でいくつか新たな経験が生じ、それが重要な出来事として想起されている。それは、奥さんと夏川さんが二人で箱根に一泊旅行したことから始まるのだが、筆者との対話のなかでそれは次のように語られた。

奥さん 私が、「どこも旅行行ってないから、じゃあ温泉でも行きましようか」って、箱根に1回、2人で一泊の旅行に行ったんですよ。（……）行けるかな、と思って行ったんですが。

夏川 行った。

奥さん そして行けたんですよ。2人で一泊。帰ってきたのね。そしたらやっぱり、行っただけでもよかったよね。きつとね。

夏川 そうすね。はい。

奥さん うん、うん。それから、行く、いろいろと出かけられるようになって。

最初「行けるかな」と思っていたのは、変化した夏川さんの体力や認知能力などが非日常的な場に耐えられるのか、奥さんがひとりで十分サポートできるのかといった点で自信がなかったためであろう。家庭という勝手のわかった日常場面ならともかく、旅先では何が起こるか予想がつかない。そういう場に「行けた」ということは、その非日常性に対応できたことを意味する。

もともと旅行が好きだった夏川さんご夫妻は、箱根旅行後しばらくして2度の海外旅行にも挑戦する。1回目は、T作業所の嘱託医から誘われた、障害者を主体とするフィジー旅行であり、もう1つは友人に誘われたシンガポール旅行である。グループ旅行とは言え、言葉の通じない場で数日間過ごすことは、夏川さんにとって箱根旅行以上の挑戦だったろう。また、顔見知りもメンバーに加えた団体旅行なので、T作業所の一泊旅行のときと同様の不安もあったかもしれない。その旅行が成功裡に終わったとき、それまでは「何が起こるかわからない未知の空間」であったものが、「なんとかなる空間」へと変わってきたのではないかと思われる。さらに、フィジー旅行の直後、夏川さんは旅行を企画した医師に勧められ、脳卒中家族会で旅行の体験について短時間ではあったがスピーチした。これ

は、多くの人々の前に脳卒中の体験者として（あるいは失語症者として）立つことを意味しており、それは夏川さんにとって大きな体験であった。その時のことは、「どきどき、どきどき、どきどきだよね、ほんとにね。」と語られる。

外部の経験から作業所内の活動へ

以上述べたような活動は、T 作業所の外で起こっているわけだが、こうした外の活動の余波は T 作業所での夏川さんの態度やふるまいにも及んでいるように見える。例えば、この年以後、夏川さんはより積極的に作業所の旅行にも参加するようになった。96 年の 9 月に一泊で横浜散策が行われたときにも夏川さんは奥さんを伴うことなくひとりで参加しており、スナップ写真を見るとその旅行のことを今でも思い出すことができる。奥さんはこういった一泊旅行に対する態度の変化を、フィジー旅行と結びつけて、「(T 作業所の旅行に 1 人で参加できるようになったのは) きっとそのころ、だと思っますよね。その旅行(フィジー旅行) 行ってきてから」と言う。考えてみれば、T 作業所もまた、夏川さんにとって家庭の外の世界である。外の世界全体が身体的に活動可能な空間として拡大し、それとの対比のなかで、家庭に近い作業所という場がいつそう安心できる場と意味づけられたのではないかと思われる。人間の生きている場は、自分の身体と家庭などの拠点を中心として広がっているのだが、その外縁が広がると、中心に近い部分の意味も変化するのかもしれない。そうしたなかで、スナップ写真を撮られる場面において微笑む夏川さんが生まれてきたのである。

1998～2001 年：カメラに向かうポーズの出現

1998 年から 2001 年頃までは、夏川さんが T 作業所という場で自分の居場所を見つけて、ある意味で安定していった時期である。まずスナップ写真のデータを眺めておくと、夏川さんが写る 1998 年の 81 枚の写真のうち、カメラの方を向いているのは 66%、笑顔が見られるのが 27%であった(表 1)。笑顔の割合はほとんど同じだが、カメラの方を向いている写真の割合は前年よりも多くなっている。それ以上に異なってい

るのは、この年の春に初めてカメラに向かって V サインをする姿が見られたという点である(図 4)。職員によれば、これは夏川さんの「得意のポーズ」とのことで、同じポーズの写真は 1999 年以降にもコンスタントに何枚か認められる。カメラに向かって笑顔を作ることは儀礼として一般的かもしれないが、V サインなどの特殊なポーズは、ふつう仲間うちのインフォーマルな写真でしか見られない。夏川さんの V サインも、夏川さんが T 作業所という場をインフォーマルな空間と見なし、カメラの向こう側にいる職員に対して、いつそう親和的な感情を抱き始めたことを示すものと理解できる。また、同じ V サインは、作業を行っている日常場面のスナップ写真でも認められ、その姿からは、作業を行う自分を恥ずかしいなどとは思っておらず、多かれ少なかれそういう自分を受け入れていることを示唆している。

人間関係上の安定

この 1998 年以降、筆者の目に映る夏川さんは、周りの何人かの利用者との間に親しい関係を結び、職員に対しても信頼感を示して、T 作業所における生活をかなりの部分楽しんでいるように見えた。筆者がはじめて夏川さんと出会ったのもこの頃であり、当時の筆者の目には、夏川さんはそこで落ちついて作業に取り組んでいるように見え、物腰が穏やかで愛想がよいため、ボランティアとしてその場に入った筆者にとっても近づきやすい存在であった。T 作業所という場が、たまたまそこにあるから利用している、自分の生きる場の外部にある一過的なリソースではなく、船にとっての港のような、自分の居場所として意識されるようになってきたとも言えるだろう。

職員の報告によれば、作業所の一泊旅行における行動にも、2001 年に顕著な変化が生じたという(2000 年の旅行は都合により日帰りであった)。それまで夏川さんは、決して大浴場で他の利用者とともに入浴しようとはせず、部屋に付属したバスタブですませていたところが、2001 年夏に旅行したときには、「おひとりですすすすすと大浴場に行かれた」という。奥さんは、他の人と一緒に入浴できるようになったのは、「慣れてきたのと、みんながやってるから自分もできるんじゃないかっていう、そういうのもあったでしょ

うね。」と説明する。「みんなやっているから自分もできる」と夏川さんが考えたとするなら、これは、自分を「みんな」と等質的な存在と見なす観念が夏川さんのなかに定着してきたことを意味している。またそれと関連して、他の何人かの利用者の方々とも親しくなった夏川さんにとって、失敗してもそれは周りの人もやっていることで、お互い許容できるのだとか、助け合ってなんとかできるのだ、といった信頼感が生まれてきたということも言えるかもしれない。この頃、他の何人かの利用者と作業所外で食事に出るという行動も見られている。

従事する作業の安定

こうした人間関係的な安定とともに、1998～2001年頃は、夏川さんが作業所内で行う作業もほぼ固定し、生活パターンも安定した時期でもあった。夏川さんが当時よく行っていた作業は、紙パックの紙線維をほぐす作業、できあがったお面にジェッソ（仕上げの白い顔料）を塗る作業、また、手漉き葉書に郵便番号欄のスタンプを押す作業などである。また、T 作業所では地域に出て行く活動の一環として、小学校や老人ホームなどで手漉き葉書教室やお面教室などを定期的に行っているのだが、夏川さんはこの頃から、頼まれるとそうした教室にも協力するようになった。この作業所で自分が何をやればいいのかということが夏川さんのなかで明確化し、その枠組のなかで生きていくことで安定するようになったとも言える。

変化への抵抗

ただし、この時期に夏川さんが行う活動のレポートリーはかなり柔軟性に欠け、確立した枠組に固執する傾向も強かったように見える。例えば、作業所の職員が、新しい作業をやってみようということで夏川さんに声をかけても、夏川さんはなかなかその誘いに対しては首を縦に振らなかった。2000年の時点で筆者が職員のひとりに話を聞いたとき、その職員は夏川さんに言及して次のように述べた。

夏川さんなんかは、けっこうあの一、やっぱり、な、なんでもちょっと、やだっていうところが…、新しいことを始めるのもやだとか、あの一、とにかく何でもやだっていう時があるんですけど

も……

例えば、当時の担当職員（男性）は、夏川さんに台所仕事を体験してもらおうとして昼食作りの手伝いに誘ったことがあった。「今の時代、男性でも料理くらいはできないといけませんから、一緒にやりませんか」と言ってみたのだが、やはり繰り返し断られたという。また、筆者が夏川さんとかなり顔見知りになった頃、コースターの模様づけ（色つきの和紙をちぎって手漉きのコースターの上に置いていく作業）について夏川さんにもやってみましょうと勧めたことがある。そのときにも「やりません」とにべもない返事が返ってきただけであった。

また、職員は組織のなかで役割を果たすという経験もしてもらおうということで、作業所の行事に関わるようにも勧めるのだが、夏川さんは横に首を振るばかりで、特に「手強い」存在だった。例えば 98 年暮れに、職員が作業所のクリスマス会の司会を依頼したとき、たまたま筆者もその場に居合わせたのだが、そのときの様子は次のように記録されている。

朝の話し合いのあと、夏川さんは女性職員に来週のクリスマス会で司会をやってもらえないかと頼まれていた。

職員 やってくださいよ。

夏川 とんでもない。

職員 私が黒子 [=話している人の隣で内容を小声で教える、いわば演劇のプロンプター] やりますから。それに、お医者様も人前で話すようにした方がいいっておっしゃったじゃないですか。

夏川 やりません。

職員 じゃあ、誰か推薦して下さいよ。

夏川さんは返事をせずに立ち上がって、コーヒーカップを洗うために流しに向かった。

結局この年のクリスマス会では、夏川さんは、他の何人かの利用者が進行係やアトラクション係などを行っている傍らで、単なる一参加者として出席した。このように、夏川さんが普段行っている活動の枠組みを越えて自分から何かをやったり作業所の運営のために



図5 2001年末の夏川さん

力を貸したりということに強い抵抗を示す時期は、かなり長い間続いた。

2001年末～2004年：役割を受け持つ姿の出現

以上で述べたように2001年頃までは、夏川さんはT作業所の作業環境や対人的環境になじみ、その安定した状態に自足しつつ、それ以上に活動を広げることに抵抗を示す態度が前面に出がちであった。しかしそうした態度も、2001年末以降少しずつ変化し始める。筆者の観察や奥さんや職員の方々の報告から明らかかなように、夏川さんはT作業所内の作業において、新たなことをやってみようとする姿勢が見られるようになり、さらには、行事においても重要な役割を担うことを受け入れるようになる。夏川さんと作業所の関係が——ひいては、夏川さんにおける作業所という場のイメージが——ここでまた別のステージに入ってきているように思われる。

作業所を代表する役割を演じる

まず夏川さんの行動の変化が筆者などにも感じられたのは、2001年のクリスマス会であった。上で述べた通り2001年のスナップ写真はそれほど多くないのだが、クリスマス会の写真は残っている。そのなかの何枚かが、トナカイの恰好の職員の隣でおどけているサンタクロースの扮装の夏川さんである。このとき夏川さんはその職員とともに、普段ボランティアに来て

くれているお客さんの席をまわって、プレゼントを渡す役目を果たしていた。写真のなかには、夏川さんがサンタクロースの扮装でいたずらっぽくカメラに向かってVサインをしているものもあり、彼がこの役目をむしろ楽しんでいると感じさせる(図5)。この役目を果たすことは、クリスマス会を主催し出席者を楽しませるホストの立場に自分を位置付け、その立場をお客や他の利用者にも示すことを意味している。そこで夏川さんは、作業所のサービスを単純に享受する受け身の人間ではなく、むしろ作業所と自分を一体化させて行動する主体になっているように見える。

2002年2月になると夏川さんは、T作業所の対外的イベントのなかでもっと多くの聴衆の前に立つことになる。それは2001年から年に1回開かれている周辺地域との交流のための催しであり、2002年には、失語症を経験した落語家の落語や、言語聴覚士と失語症者が登壇した失語症の解説と体験報告が行われた。そこでも夏川さんは、失語症体験者のひとりとして聴衆の前に立ち、言葉少なではあるが自分の体験を報告している。上で述べたフィジー体験の報告(1996年)は、あくまで主治医からの依頼によって行われたものであり、作業所とは無関係に行われた。それに対して、今回は作業所のイベントへの参加である。ここでも夏川さんは、T作業所という名前を背景に聴衆の前に姿を見せており、他者にそのように見られることに対する抵抗感が薄れてきている証拠とも考えられる。

この傾向は、2004年現在まで続いている。作業所の利用者のなかでも利用がいちばん長い「ベテラン」になり、夏川さん自身もそれを自覚しているようで、他の利用者に対し先輩としてふるまう様子が観察されるようになった。例えば、最近通所を始めた失語症の利用者に対して、「〇〇さん、お・は・よ・う」とわざわざゆっくりと声をかけ、黙りがちなその利用者には「おはよう」と言わせることで言葉の練習機会を与えようとするようなそぶりが見えたりもする。また2004年の地域交流イベントでは、プログラムの一部として利用者全員による合唱が披露されることになったのだが、夏川さんはその練習も率先して行い他の利用者をリードしたほか、当日には、それぞれの歌の前に、「今度は……という歌を歌います」と次の歌の紹介も行った。ここでも夏川さんは、T作業所の一員として、さらには、代表として行動し、そういう自分を聴衆の前に示しているのである。

活動のレパートリーを広げる

加えて、自分が日常的に行う作業についても徐々に動きが認められ、2001年頃より、夏川さんが自分から「これをやってみたい」と言い出したり、あるいは職員が紹介すると乗り気になったりするようになった。このときは夏川さんの興味関心は長続きしなかったが、何でもいやと言っていた頃と比べると大きな変化である。例えば、2001年には夏川さん自身から習字をやりたいというリクエストが出て、職員は毎週金曜の「クラブ活動」の時間に月1回習字の先生を呼ぶことにした（ただしこのときは、夏川さんは初回に参加しただけであった）。また、パソコンの練習を始めたこともあり、職員のサポートのもとで計画表を作り、3、4ヶ月の間毎日練習した。夏川さんが陶芸に関心を示したときには、職員が地域の陶芸教室を見つけて紹介したのだが、夏川さんは3ヶ月・8回の体験コースに申し込み、ヘルパーさんとともに通って修了した。

2003年以降にもこの傾向は続いており、この年の春先から夏川さんは、これまでやったことがなかったクッキー作りの作業に積極的に参加している。筆者が2003年の夏から秋にかけて夏川さんに話を聞かせてもらった折にも、クッキー作りへの関心が複数回言及された。興味深いのは、将来の目標や希望を聞いたと

きにも「クッキー作り」という言葉が直ちに出てきていることである。

<p>筆者 今後は、こういうふうな感じのことをやりたいとか……</p> <p>夏川 んーと、クッキー作りだな。こね、こね、こね、ですね。</p>
--

別の日に「今後の希望」を尋ねた際にも、「クッキー作り」と「(クッキーの)ラッピング」と、同様の返事が返ってきた。このように夏川さんは、T作業所の中に活動の中心を見つけ、それを自分の将来の活動としても位置付けるようになってきたとも言える。

以上のような言動は、T作業所が通過の場というよりも、着地の場としてイメージされ始めたことを反映している。かつてT作業所は、夏川さんにとって病院のような一時的な場所にすぎなかったが、現在では将来のイメージのなかにもT作業所の活動が組み込まれているようである。2004年になってからたまたま別の利用者が何気なく、「今後どうするつもりなのか」という質問を夏川さんに投げかけたことがあった。それに対する夏川さんの答えは、「いられなくなるまではここにいるんじゃないかな」というようなものであった。確かに、T作業所利用の年齢の上限は特に決まっておらず、実際、現在も70代でほとんど毎日通所している利用者のかたもいる。職員は、利用者が最終的に社会復帰や社会参加をして、作業所の外に活動の場を見出すことを理想としており、病院とはまた異なる別の意味での通過の場所として作業所を定義している。夏川さんや他の利用者が、そうした職員の定義に見合うような場のイメージを持つために、さらに別の条件が必要となるのかもしれない。

考 察

以上、夏川さん自身や周りの人たちの言葉、そして、観察された夏川さんの行動などを中心的な資料として、1994年から現在までの夏川さんのT作業所との関わりをたどってきた。それは従来、環境への適応過程と

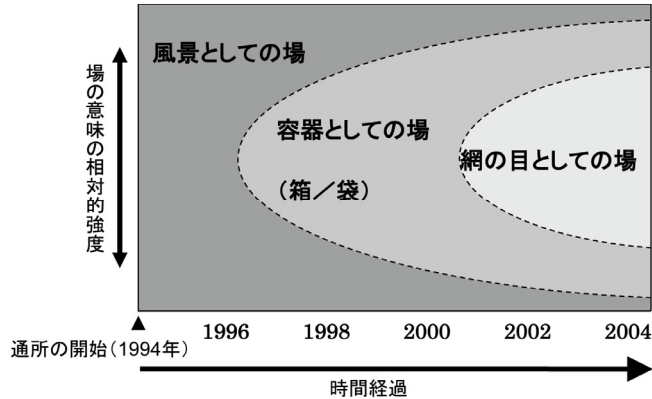


図6 夏川さんにおける場の意味の類型と変化

して記述されてきたが、「環境への適応」と言うとき、動かしたい客観的な環境がまずあってそれに対して個体が自分を変化させていく過程が思い浮かぶ。しかし当事者自身の立場から見れば、客観的な環境というよりも世界の見えが変化する過程であると言うこともできる。T 作業所は夏川さんにとってみれば受障前には出会ったことのない場であり、機能の面からもある程度の多義性をもつ環境であった。その混沌から夏川さんはある種のイメージを受け取り、あるいはそれに対して別のイメージを投げかけるなどして、場の意味を構成してきたと言える。様々な条件のもとで構成されたそのイメージは、夏川さんの行動を媒介すると同時に、夏川さん自身を変化させ、さらにはそのイメージ自体も変化させていくことになる。

この節では、夏川さんの言動に現れた場の意味を、やや抽象度を上げて比喩的なカテゴリーの形で提示していきたい。今回の結果は単なる1事例から見出されたものだが、直感的に了解可能な比喩にすることで、より幅広い事例や経験を理解する叩き台にすることができる。そのような形で結果を示しておくことは、質的研究の質を高めるための1つの工夫であるとも言える(能智, 2005)。ここで掲げる場所体験の類型は、〈風景としての場〉、〈容器としての場〉、〈網の目としての場〉と名付けることができる。これらは、夏

川さんの生活史に重ねれば上記の順で移り変わっていくようにも見える。しかしながら、それは単純に段階として区切られているというよりも揺れ動く場の見えであり見方であって、特定の時点で優勢なものがあったとしても、白か黒かという形で明確に変移するわけではない。したがって図示するとしたら、能智(2003)が失語症の意味の変化について示したように、これらもやはり重心を変えつつ重層化していくような形で理解するのが適当と思われる。図6はそれを示したもののだが、縦軸における幅が広いほど、その時点において優勢であると考えていただきたい。

〈風景としての場〉

〈風景としての場〉は、夏川さんがT作業所を利用し始めて最初の1年ほどの間に経験した場の意味を比喩的に表現したものであり、自分がそこにいるにも関わらずその周りの場が自分とどのように関係するのかが不明確な状態を示している。むしろこれは、夏川さんが積極的に使った概念ではない。むしろ、場に関する概念が呼び込まれる前段階としての空白状態に近いものであり、いやおうなく夏川さんにもたらされた場の見えである。レルフ(Relf, 1976/1999)は、空間は名前をつけられることによって人間にとっての空間

になると述べているが、ここでの〈風景〉は名づけ以前のものであり、自分とは無関係で無表情な環境と考えてもよい。クロスリー (Crossley, 2001) も示唆するように、場所が意味づけられないということは、その場所における自分の位置づけが不明確な状態に止め置かれるということでもある。通所初期の夏川さんは、そうした場所と自分の両方にまたがる混沌のなかで意味を模索していたと考えられる。

〈風景としての場〉という体験は、それを単なる〈風景〉ではないように意味づけようとする試みを引き出す。その試みは例えば、脳損傷後の自分の変化のありようや理由がわからないと感じる人が、熱心に情報を集めて空白を埋めようとするのに似ているかもしれない (Nochi, 1997)。夏川さんが、T 作業所を病院的に利用しようと試みたのは、彼なりの意味づけの試みであり、経験に基づく概念的な道具の導入であった。その試みは職員によってある程度支持されることになるわけだが、しかし日常的に行われている作業や周囲とのやりとりは、病院で行われる治療ともリハビリとも異なるのは明らかであった。道具は、周りの環境や人々との関わりのなかで使えなければ生き続けることがむずかしい (Cole, 1996/2002)。結果的に、その道具は作業所での生活の全体を理解するには不十分なものとならざるをえず、夏川さんは絶えず〈風景としての場〉に引き戻されたのではないだろうか。

〈風景としての場〉と似た経験は、一般の「環境移行」においても現れうる。例えば川野・佐藤・友田 (1998) は、短大入学という青年の環境移行において、その初期には「自分と環境が切れている」と感じる経験が認められるという。その時期は、“人間—環境システムの混乱期”であり、自分と環境の関係がまだ明確ではなく、そのために関心が自分の身の回りに限定されてしまう。これは、〈風景としての場〉の経験とも重なる部分をもつのだが、比較的短い期間で終わることが多く、1 年にもわたって続くということは少ない。

夏川さんはかなり長い間〈風景としての場〉を経験していたように見えるが、その背景には、自分の意志ではなく状況に押されるかたちでそこに投げ込まれ、十分な構えもないままに T 作業所の利用を始めたという事情がある。むろん周りの人たちは、作業所が

どういう場で何のために利用するのかを説明しただろう。しかし、当時の夏川さんはまだ聴覚理解面での言語障害が現在より重かったと考えられるし、わからないところを質問する能力も制限されていた。さらに、利用を開始してからも周りの状況を理解してそれを自分の概念的な道具として活用することも、それほど容易ではなかったと考えられる。こうした点は、多くの場合自ら意志して短大に進学し、短大という場についてもある程度前もって理解しており、入学してからも自分の力で情報収集・処理が可能な短大生とは異なっていたと言える。夏川さんの場合は言語の障害が前面に出ていたが、その他の認知障害——例えば記憶障害——でも、〈風景としての場〉は長引くことになるだろう。

短期間で通り過ぎてしまう場合はともかく、長期にわたってよそよそしい〈風景としての場〉にひとりて居続けなければならない状況はかなり苦痛であるに違いない。施設における高齢者や障害者の援助においては、〈風景としての場〉から次の場への移行が援助の前提として必要である。そのためには、理解しやすいような単純な環境設定ができればもっともよいのだが、少なくとも、その人に残されている情報収集のチャンネルをフルに活用できるような情報伝達の工夫も試みてしかならぬだろう。実際、脳損傷者の援助においてはそうした試みが行われている (高次脳機能障害研究会, 1999)。また、可能であればその人が行う場の意味づけを尊重しながら、それを少しずつ変化させるような日々の地道な取り組みも望まれる。

〈容器としての場〉

そうした〈風景としての場〉に対して、自分を〈風景〉の内側に入れられるようになるのが、次の場の意味である〈容器としての場〉である。夏川さんの場合、1995 年から 2001 年頃にかけて T 作業所の内部に人間関係を見出し、自分が行うべき活動を見出し、それを通じて、あたかも「停泊地」にいるかのように作業所内部で安定した行動を示し始める。レルフ (Relf, 1976/1999) は、場所という体験の本質は内側にいるという感覚であると述べているが、この 5 年余りの夏川さんの歩みは、T 作業所という空間に則して心理的

な境界を作り、自分をその内側に位置づけるようになる過程であったとも言える。これは近年言及されることが多い「居場所」の構築とも関連している。住田(2003)によれば「居場所」とは、「自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地のよいところ、心が落ち着けるところ、そこに居るとホッと安心して居られるところ」(p.4)だという。そのように自分の生きる場を思い描くとき、場に向かう表情もふるまいも、夏川さんに現れていたような肯定的な感情に彩られるようになるのであろう。

レルフ(Relf, 1976/1999)は彼の言う「内側という感覚」をいくつかに分類しているが、夏川さんの体験における〈容器としての場〉にもまた、その分類とは異なる複数の側面が見られるように思われる。再び比喩的な表現を使って、それを〈袋〉としての側面および〈箱〉としての側面と呼んでみたい。前者は、安心して包まれる感覚と関連しており、後者はその場に明確に役割をもった自分を位置づけられるという感覚と関連している。それぞれの側面は異なる背景のもとで個人の体験に浮かび上がり、微妙に異なる結果を引き起こすように思われる。「居場所」の議論においては、どちらかと言えば〈袋〉的な側面が強調されることが多いが、〈箱〉という体験の重要性も見過ごされるべきではない。それは例えば、家族における「治め」(共同性)の世界と「戯れ」(性)の世界のバランスが、子どもの初期の体験に強い影響を与えることとも対応するものであろう(村瀬, 1984)。

もう少し詳しく述べるなら、〈箱としての場〉は、その場において与えられる「こうすべきである」という要請に応えることができ、自分がその場の役割関係等の枠組に適切に位置づけられているという感覚に伴う場所の体験である。自分の行為に対する規範的要請は、夏川さんもかなり早い時期から感じ取っており、1995年頃には既に周りの他の利用者と同じ服装をするという意識が芽生えている。また、その後しばらくすると、作業所から提供される作業の選択肢のなかから自分に合うものを選んでその作業に没頭するようになる。予測可能なルーティンが形作られることは日常生活の安定要因であるということも指摘されている(小倉, 2005)が、与えられた枠組に自分を合わせていくことはそのための1つの選択肢であるかもしれな

い。また、場の要請に従うためには、自分がその要請に応えられるという自信も必要になる。夏川さんの場合は、1996年に行われた海外旅行などの体験がそうした自信につながったと思われる。これは、1つの場の意味が単独に存在するのではなく、その外部との関係にも支えられていることを示す例と言えらるだろう。

一方、〈袋としての場〉の体験は、場の親和的対人関係の側面と関係している。〈袋〉に伴う、場に包まれている感覚は、「居場所」感のもっとも基本的な特徴であると同時に、そこから自分の位置づけをはっきりさせていける出発点を提供するような感覚でもある(北山, 2003; 住田, 2003)。夏川さんの場合その感覚を支えているのは、職員との間のいくらか垂直的な性格をもつ関係性と、他の利用者との間の、どちらかと言えば水平的な性格をもつ関係性の構築である。1998年から2001年頃には、既に他の利用者と食事に出たり、職員に依存したりという行動が認められた。また、いずれの関係性も、単なる〈袋〉にとどまらず〈箱〉的な体験とも部分的につながっているように思われる。T作業所という場でどういう役割を果たせばいいかは、職員との関係性のなかで学び取られていたし、また、他の利用者との関係のなかで、そこでどのような服を来てどのように振る舞えばいいかが学び取られていたからである。今回のデータでは〈袋〉と〈箱〉の関係を詳細に示すことはできなかったが、少なくとも2つの体験が絡み合うような形で発展するのではないかと推測される。

ある種の認知能力の障害は〈風景としての場〉を長引かせ、場を〈容器〉的に体験するための土台作りをしばしば困難にする。失語という状態もまたわかりであり、周りの人からの口頭での説明がわからない時には場の構造や機能の理解に時間がかかり、その場が投げかけてくる要請を理解しにくく、〈箱〉の中に自分を位置づけることがむずかしくなる。また、その場を〈袋〉的と感じるようになるために必要な、周りの人びととの間の親和的な関係性を構築する際にも、言語的コミュニケーションが重要な役割を果たすことは容易に想像できる(Parr et al., 1997/1998)。言語障害はそれぞれの過程の阻害要因となりうるのである。リハビリテーションにおいて〈容器としての場〉の体験を支援する場合には、〈袋〉的な側面と〈箱〉的な側面

の両方に目配りをしつつ、それぞれに応じた対応が必要と思われる。

〈網の目としての場〉

〈容器としての場〉は自分を囲む実体のようなものとしてそこにあり、個人はその内側にいて〈容器〉自体に手を触れることはできないしその必要もない。夏川さんも 2001 年頃までは、用意されている作業のバリエーションを超えて自分に合ったものを探すことはなく、あくまで受動的にふるまっていた。役割は非常に固定的に捉えられており、自分の位置が場のなかで定まってしまうと、そこから動こうとしない時期も認められた。しかし、近年の夏川さんの T 作業所との関係を見ると、〈容器〉とは別の性格をもつ場が、徐々にではあるが新たなイメージとして浮かび上がりつつあるように思われた。その場の意味をここでは〈網の目としての場〉と呼んでおこう。この用語もまた、その場の性質を直感的に伝えるための比喻であることは言うまでもない。

場を〈網の目〉として受け止めるとは、自己が場を形作る結節点の 1 つになって他の人々とつながりあい、場の構成を担うことを意味する。夏川さんの場合、T 作業所の代表のような役割として外部の人の前に立ったり、一種のリーダーとして他の利用者の前に出たりする場面で、〈容器〉の単なる中身という立場から少し離れた場所に身を置いている。こうした場の感覚は、〈箱としての場〉の発展とも考えられるが、それ以上の意味ももっている。〈箱〉においてもその場からある役割や行動を要請されるのだが、それが場の全体を何らかの点で代表し、本人がその意義を受け止めたとき、〈箱としての場〉は〈網の目としての場〉へと質的に変化すると言えるだろう。そこではまた、単に与えられた役割をこなすだけの受動的な夏川さんのあり方は、より積極的により影響力をもつあり方に席を譲ることになる。

こうした〈容器としての場〉と〈網の目としての場〉の対比は、集団や組織を特徴づけた先行研究を思い起こさせる。よく知られているように、中根 (1967) は日本型の社会をタテ社会、西洋型の社会をヨコ社会として特徴づけた。また、リッカート

(Lickert, 1967/1968) の組織研究でも、独善的なリーダーシップをもつ専制的組織と民主的なリーダーシップをもつ集団参画型組織とが区別されている。それぞれ前者は〈容器としての場〉と、後者は〈網の目としての場〉と特徴を共有するようにも見える。〈容器としての場〉では、個人の行動を決定するのは、その上に位置づけられる職員が体現する組織全体のように感じられ、一方〈網の目としての場〉では、個人は組織の一構成員でありその行動は組織のあり方にも影響を与えうるからである。もっとも、中根やリッカートの分類は社会や組織の客観的な分類であって、今回の研究では T 作業所という組織自体に顕著な変化があったわけではない。あくまで夏川さんの様々な行動や表現において構築されたストーリーのなかでの区別であり変化である。

そうした変化は、一般に人々が近代化の過程で経てきた社会像／世界像の変化と大まかに対応するものでもある。竹田 (2004) の述べるように、中世以前の西欧では社会は一種の運命的な所与と考えられていたが、フランス革命以降になると自分もその一部をなす対象として社会を捉えるようになっていった。19 世紀になると、必要に応じて変えていけるものとして社会の総体を対象化しようとする社会科学が生まれ、政治制度的にも民主主義的な体制が世界各国で広く受け入れられるようになった。むしろそれで人々が体験するすべての問題の解決が約束されたわけではないし、近代には近代特有の新たな問題が生じている。しかし、少なくともそうした世界像をもつことで、人々は社会の現状を自らの力で変化させていける可能性の原理を手にしたと考えられる。夏川さんにおいても、とりわけ〈容器〉から〈網の目〉への変化は、そのような世界像の変化を連想させるものであり、人類が歴史的に体験した世界観の変化が個人のなかで反復されているようにも見える。

実際、〈網の目としての場〉という考え方が、個人が生きている狭い場を超えて他の場面や集団にも適用されると、その個人にとっての生き方の可能性もいっそう広がることになるかもしれない。夏川さんは現在のところ、T 作業所という組織を自分の生きる場と捉え、自分の将来を T 作業所とともにあると語っている。しかし彼は同時に、例えば「失語症者としての自

分」という他の集団との関連も意識し始めており、そこには作業所という場を相対化する契機も認められる。能智（2003）が記述した別の失語事例は、自分の失語症を他の失語症者との共通の苦悩として、さらに、社会の人の理解すべき知として定義し直すことで、自分を失語症者という抽象的な共同体の一員とみなすようになった。その事例は現在では作業所への通所をやめ、社会的な活動がより活発なグループに参加している。夏川さんは現在のところ、T 作業所との一体感が強いけれども、様々な条件のなかで、将来は作業所から出るという方向を模索し始めるかもしれない。そしてそれは、作業所の理念とも一致する方向であろう。

まとめと展望

本研究では、一人の失語症患者において、「場の意味」という形で浮かび上がってくるライフストーリーのパターンを、一種の比喻を用いながら提示してきた。今回はそれほど詳しく論じられなかったが、後天的に障害を負うことが自分自身と生活の場を含む体験全体の変化と関わるものだとしたら、障害者の心理学でよく言われる「障害に適応する」とか「受容する」とかいった言葉も、もう少し広い意味で捉えていく必要があるだろう。南雲（2002）は「障害受容」の概念を論じながら、受容の主体は誰かということの問題にしている。これも「障害受容」を考えるための視野を広げる意味で重要だが、他にも、受容の対象とは何かという視点も見落とすことができないのではなかろうか。能智（2003）は失語症者の適応過程を、客観的に存在する「障害」に適応するのではなく、「障害」の意味づけが深められていく過程として記述し、同時に、その意味づけが人生の見えとも連動していることを示唆した。これは、「障害」を時間的に延長された意味として捉えつつ適応過程を特徴づけたものと言えるのだが、その過程はさらに、空間的に延長された場に関するストーリーの、全体的な変化として理解することもできる。

場に関するストーリーは、時間軸上に展開する人生の物語と交錯しながら展開するダイナミックな過程と

して捉えられなければならないだろう。それはコール（Cole, 1996/2002）の言うアーティファクトといくらか共通の性質をもつ。無論ここで言うストーリーは、他の人々との共有性が必ずしも高くないという点でアーティファクトとは異なるわけだが、単なる静的な認知枠組として頭のなかに固定されているものではなく、常に様々なレベルの文脈と絡みあう形で絶えず生成される動的なものであるという点では類似している。場の意味づけは、人生の物語以上に直接的な知覚に媒介されるであろう。それは外部条件などの文脈によって常に変化を被り、本人の自己理解や行動の決定がそのストーリーに基づく形で行われ、さらに、その行動は環境を変化させながら再び場の意味に影響を与える。そのような円環的なプロセスこそがストーリーを支えている。

そのようなプロセスとしてのライフストーリーは、面接場面の語りを分析するという従来の手続きだけで捉えることはむずかしいと思われる。むしろこれまでエスノグラフィで用いられてきたようなデータ収集（佐藤, 1992）を行うことで、直接の語りに現れない部分をも読みとっていかねばならない。今回の研究では、語られざるストーリーも含めて捉えていくために、語りの内容に焦点を絞るだけではなく、語りの内容以外に対象者が表出する様々な行動にも目配りして、データを補完していった。人はあらゆる行動に自分を表現する存在であるという観点に立てば、その人のふるまいや環境への働きかけも、ライフストーリーを知る上での重要な手がかりとなる。また今回は、長期的な観察データの他に、写真などの画像データや本人以外の語りも含めて分析対象とした。近年は映像や画像のデータを質的に分析する手続きも提案されている（やまだ, 2002；荒川, 2005）が、今後はそうした分析手続きも参考にしながら、個人の写真を用いたライフストーリーの分析も工夫していけるのではないかと思われる。

今回のような、長期にわたる対象者の行動を様々な情報源から収集していく方法には、やはり固有のむずかしさもある。より長期にわたるストーリーをライフストーリー的に再構成するためには、周囲の人からの報告や映像記録を今回以上に広範な形で入手したり、より長期間にわたって観察を続けてデータを蓄積した

りするなどの作業が必要になる。結果的に、1つの研究を完成させるのに多大な労力と時間がかかることになり、特に卒業論文や修士論文など時間制限がある場合には、それが大きな壁になるだろう。そうした場合、本研究のように、ライフストーリーの特定の側面に焦点を絞ったデータ収集をすることが必要かもしれない。また、今回はたまたま写真資料が比較的豊富に残っていたわけだが、必ずしもそういう幸運に恵まれるとは限らないという点も頭に入れておいた方がよい。

加えてデータ分析上の問題として、研究者が直接観察したものではない資料をデータとして採用していく際には、その資料に対してよりいっそうの批判的な検討が必要になることも指摘しておきたい。例えば写真によるデータの場合には、それがいつどのように撮影されたかが問題になるし、第三者の語りに対してはその語りに含まれる観察がどういう立場からなされたかを問う必要がある。複数の情報の間に矛盾が見られたときに、その矛盾をどう処理していけばいいかも考えておくべきことであろう。むろん、矛盾したからといってどちらかの情報が信頼できないというわけではなく、ライフストーリーの別のバージョンと考えることも可能である。しかし、ライフストーリー研究としては、その矛盾を単純に指摘したり記述したりするだけで終わるのではなく、その矛盾を説明し、あるいは別のレベルで統合するための作業も必要と思われる。

こうした多様な資料のなかから構築されたストーリーを研究対象者本人の「ライフストーリー」と言ってよいのかどうか、という疑問も当然出てくるだろう。この点で興味深いのは、文芸批評家の加藤典洋(2004)の言う「脱テキスト論」である。彼は、テキストの外側に実体としての作者を仮定せず多様で自由な読みを強調するポストモダン的なテキスト論に対して、その行き過ぎを批判している。やや乱暴に要約するならば次のように言えるだろう。読むという行為においては常に、実際には存在しないかもしれない「作者の像」がそのテキストの内側に想定されており、テキストの意味はその「作者」との対話のなかで浮かび上がってくる。テキストの多義性だけを言いつのるとき、テキスト全体の価値を決定したりそれについて論じあったりすることが困難になる。テキストの評価について相互に見解を交換していく場合には、「作者の

像」のような共通の土台が必要だからである。人の言動に関するデータもまた一種のテキストであるとするなら、加藤(2004)の言うような「作者の像」——ライフストーリー研究の文脈では、「その人のストーリー」——をそのデータの内側に想定して構築を試みることは、その分析の質を判断したり修正したりするための前提となるだろう。

そこで構築されたストーリーは、データの向こう側に仮定される対象者の唯一絶対の姿、あるいはその対象者本人が自分についてもっているストーリーと同一のものかどうか、厳密な意味で確かめる術はない。沈黙の部分にもデータを見出して今回の方法をもってしても、データの外側の「ほんとうの姿」に到達することが保証されるわけではないだろう。本稿で提示した方法はあくまで、データの内側で、その人に関するストーリーをより豊かな形で構築するための1つの工夫であり、構築の主体は研究者である。しかし、構築されるのが、「その人のストーリー」である限りにおいて、その像は研究者の恣意によって作られるものではなく、「その人」と呼ばれる中心から離れることはできないであろう。研究者はその、実体としては存在しないかもしれない参照点に何度でも戻りながら、その構築されたストーリーを発展させたり組み替えたりすることになる。そうした作業を行っているのは研究者ばかりではない。私たちはひとりひとり、日常生活のなかで、まさにそのようにして他者理解を深めているのではないかと思う。

引用文献

- Angrosino, M.V. (1994). On the bus with Vonnie Lee: Explorations in life history and metaphor. *Journal of Contemporary Ethnography*, 23, 14–28.
- 荒川 歩. (2005). 映像データの質的分析の可能性——mivurixによる指折り行動の分析から. 質的心理学研究, 4, 66–74.
- Biklen, S.K., & Moseley, C.R. (1988). "Are you retarded?" "No, I'm Catholic": Qualitative methods in the study of people with severe handicaps. *The Journal of the Association for persons with severe handicaps*, 13, 155–162.
- Booth, T., & Booth, W. (1996). Sound of silence: Narrative research with inarticulate subjects. *Disability & Society*, 11, 55–69.

- Bruner, J.S. (1999). 意味の復権——フォークサイコロジに向けて (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Bruner, J.S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.)
- Charmaz, K. (2002). Stories and silences: Disclosures and self in chronic illness. *Qualitative Inquiry*, 8, 302–328.
- Cole, M. (2002). 文化心理学——発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ (天野清, 訳). 東京: 新曜社. (Cole, M. (1996). *Cultural psychology: A once and future discipline*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press.)
- Crossley, M.L. (2001). Sense of place and its import for life transition: The case of HIV-positive individuals. In McAdams, D.P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.), *Turns in the road: Narrative studies of lives in transition* (pp.279–296). Washington, D.C.: American Psychological Association.
- 榎本博明. (1999). 〈私〉の心理学的探求——物語としての自己の視点から. 東京: 有斐閣.
- 藤竹 暁 (編). (2000). 現代人の居場所. 東京: 至文堂.
- 加藤典洋. (2004). テクストから遠く離れて. 東京: 講談社.
- 川野健治・佐藤達哉・友田貴子. (1998). 短大入学時の環境移行: 気分の原因帰属を手がかりとしたモデル構築の試み. *発達心理学研究*, 9, 12–24.
- 北山 修. (2003). 自分の居場所——精神分析理論と臨床. 住田正樹・南博文 (編), 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp.21–37). 福岡: 九州大学出版会.
- 高次脳機能障害研究会. (1999). やってみよう! こんな工夫——高次脳機能障害への対応事例集. 東京: 簡井書房.
- Lickert, R. (1968). 組織の行動科学: ヒューマン・オーガニゼーションの管理と価値 (三隅二不二, 訳). 東京: ダイヤモンド社. (Lickert, R. (1967). *The human organization: Its management and value*. New York: McGraw-Hill.)
- Miczo, N. (2003). Beyond the "fetishism of words": Considerations on the use of the interview to gather chronic illness narratives. *Qualitative Health Research*, 13, 469–490.
- 南 博文. (2001). まちの変化と N さんの生活世界. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), *カタルグ現場心理学——表現の冒険* (pp.140–147). 東京: 金子書房.
- Mishler, E.G. (1991). *Research Interviewing: Context and Narrative*. Cambridge: Harvard University Press.
- 村瀬 学. (1984). 子ども体験. 東京: 大和書房.
- 内閣府 (編). (2004). 平成 16 年版 障害者白書. 東京: 財務省印刷局.
- 南雲直二. (2002). 社会受容——障害受容の本質. 東京: 荘道社.
- 中根千枝. (1967). タテ社会の人間関係——単一社会の理論. 東京: 講談社.
- Nochi, M. (1997). Dealing with the 'Void': Traumatic brain injury as a story. *Disability & Society*, 12, 533–555.
- 能智正博. (2000). 通所授産施設における障害者理解の枠組み——定性的研究の実際 (67). 日本心理学会第 64 回大会発表論文集.
- 能智正博. (2003). 「適応的」とされる失語症者の構築する失語の意味——その語りに見られる重層的構造. *質的心理学研究*, 2, 89–107.
- 能智正博. (2005). 質的研究の質. 伊藤哲司・能智正博・田中共子 (編), 動きながら識る, 関わりながら考える——心理学における質的研究の実践 (pp.155–166). 京都: ナカニシヤ出版.
- 小倉啓子. (2005). 特別養護老人ホーム入居者のホーム生活に対する不安・不満の拡大化プロセス. *質的心理学研究*, 4, 75–92.
- Parr, S., Byng, S., & Gilpin, S. (1998). 失語症をもって生きる: イギリス脳卒中体験者 50 人の証言 (遠藤尚志, 訳). 東京: 簡井書房. (Parr, S., Byng, S., & Gilpin, S. (1997). *Talking about aphasia*. Buckingham: Open University Press.)
- Pearce, A., Clare, L., & Pistrang, N. (2002). Managing sense of self: Coping in the early stages of Alzheimer's disease. *Dementia*, 1, 173–192.
- Relf, E. (1999). 場所の現象学——没場所性を超えて (高野岳彦・阿部隆・石山美也子, 訳). 東京: 筑摩書房. (Relf, E. (1976). *Place and placelessness*. London: Pion.)
- Robinson, W.S. (1951). Logical structure of analytic induction. *American Sociological Review*, 16, 812–818.
- 佐藤郁哉. (1992). フィールドワーク——書を持って街へ出よう. 東京: 新曜社.
- Schegloff, E.A., & Sacks, H. (1972). Opening up closings. *Semiotica*, 7, 289–327.
- 住田正樹. (2003). 子どもたちの「居場所」と対人的世界. 住田正樹・南博文 (編), 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp.3–17). 福岡: 九州大学出版会.
- 竹田青嗣. (2004). 近代哲学再考. 東京: 径書房.
- Tuan, Y. (1988). 空間の経験 (山本浩, 訳). 東京: 筑摩書房. (Tuan, Y. (1977). *Space and place: The perspective of experience*. Minneapolis: University of

Minnesota Press.)

やまだようこ．（2000）．人生を物語ることの意味——
ライフストーリーの心理学．やまだようこ（編），
人生を物語る——生成のライフストーリー（pp.1—
38）．京都：ミネルヴァ書房．

やまだようこ．（2002）．現場心理学における質的デー
タからのモデル構成プロセス．質的心理学研究，1，
107—128．

山鳥 重．（1985）．神経心理学入門．東京：医学書院．

謝 辞

研究に協力して下さった T 作業所の皆様，そして，
スナップ写真の使用を快く承諾して下さった，夏川さ
んご夫妻に深く感謝いたします。

（2005.3.31 受稿，2005.10.27 受理）